

プロローグ 時と記憶の扉

プロローグ

時記憶の扉

鳳凰花^{ほうおうか}（^①）が咲く交差点に、藤に覆われたカフェがある。風が吹くたびに、緑の葉がそつと揺れ、青春の物語を囁いているようだった。午後の日差しが枝葉^{えだは}の隙間から壁に注ぎ^{そそ}、淡い金色に輝いていた。窓際の角^{かど}には実木のテーブルがあり、その上には二杯の湯気立つカプチーノが置かれていた。コーヒーの香りが空气中に広がっていた。

制服を着た二人が、高校時代の最後を迎えようとしていた。彼女たちはもう五年間付き合った仲良しだが、あと一か月余りで卒業する。そのうちの一人は窓に背を向けて座り、活気に満ちるはずの年頃にもかかわらず、重苦しい様子だった。その少女はペンをしっかり握り、真剣に一文字ずつ書いていた。額^{ひたい}にはうっすらと汗が浮かんでいた。

向かいにいたエイヴリーが不思議そうに尋ねた。

「サブリナ、何書いてるの？」

少女は顔を上げて、しばらく沈黙し茫然としながら言葉を吐

(1) 鳳凰花 マメ科ジャケツイバラ亜科で、初夏に長く伸びた花軸に小さな花をたくさんつける。鮮やかな朱赤色で蝶のような形の花を咲かせる。中国では、卒業の別れや青春の情熱を連想させる花である。

き出した。

「謝りの手紙よ！」

「誰に？君らしくないね」

とエイヴリーは驚きを込めた声で言った。

最後の一文字を書き終えて、手紙を封筒に入れながら説明した。

「感謝の手紙と言ってもいいかな。あの子に渡す機会はないかもしれないけど、頭の中にある声が浮かぶの。書かなければ安心できない」

「二人の間に何かあったの？」

「ああ、その記憶は薄氷みたいで、こんなにも若い時代に、感情を強く握りしめていたのね。その数か月の色はとても鮮明

だった。よく笑って、泣いて、怒って、騒いで。最終的には人間関係の嵐に巻き込まれ、残ったのは無限の静寂だけ。でも、一生懸命だったことは確か、時間を無駄にはしなかったわ」

この言葉は話の筋を掴めないものだった。物の移ろい、光に逆らって、顔は影に包まれていた。思考は藤を辿り、路地を通り、時空の奥深くへと遡さかのぼっていった。彼女はゆっくりと話し始めた。

「これはもう一年前の話よ。あのぼんやりとした朝、いつものようにスクールバスで目を閉じて休んでいたの……………」

「そんなにちは、ここ座ってもいいですか？」

腰まで届く漆黒の美しい髪と人形のような大きな目をした乙女が話しかけた。派手な美しさが印象的だ。サブリナは眠たげな目をこすりながら辺りを見回し、ほとんど満席であることに気づいて、渋々微笑みを浮かべ、嫌々ながらも同意した。眠くて、ほんの少し目を閉じただけで、交流する気すらなかった。そうしてぼんやりしていると、学校の門に着いた。バスを降りた後、冷たい風が吹き付けて、すっかり目が覚めた。遠くから歩いてくるある女の子に向かって蝶が飛んできた。その蝶は寒さにも負けずに空中で舞っていた。くるくると女の子の周りを二周して、少しの間指先にとまり飛び去った。女の子はリュックに圧迫されて背中が曲がり、全体的に質素な感じ^{しつせ}がしたが、どこか懐かしい雰囲気もあった。サブリナはその女の子

プロローグ 時と記憶の扉

のリュックにある桜の刺繍をじっと見つめ、まだこの時は、この人が自分の青春に濃い色を加えることになることを知らなかった。